

105 仮庵祭でのイエス(2)

ヨハネによる福音書 7 : 25~36



25 さて、エルサレムの人々の中には次のように言う者たちがいた。「これ(→イエス・キリスト)は、人々(→ユダヤ人の宗教的指導者たち)が殺そうとねらっている者ではないか(→じゃないか)。

26 あんなに公然と(おおっぴらに)話しているのに、何も言われぬ。([最高法院]=[サンヘドリン]の)議員たちは、この人がメシア(→ヘブライ語「マシアハ」:油注がれた者)だということを、本当に認めたのではなからうか。

27 しかし、わたしたちは、この人がどこの出身かを知っている。メシアが来られるときは、どこから来られるのか、だれも知らないはずだ。」

→(リビング・バイブル) だけど、この人がキリストのわけはないよ。どこの生まれか、身元が知れているんだから。キリストは、どこからともなく突然現れるはずだからね。

28 すると、神殿の境内で教えていたイエスは、大声で言われた。

「あなたたちはわたしのことを知っており、また、どこの出身かも知っている。わたしは自分勝手に来たのではない。わたしをお遣わしになった方は真実(=true:真実の、本当の、本来の、適正な、厳密な、本物の、正真正銘の、純種の、純粋な、忠実な=父なる神) であるが、あなたたちはその方(=父なる神) を知らない。

29 わたしはその方を知っている。わたしはその方のもとから来た者であり、その方がわたしをお遣わしになったのである。」→イエスの神性宣言

【参考】イエスは大声で・・・(大声は、イエスの厳粛な宣言の始まりである)

タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数: 8 / 聖句等の総数 33250]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳)
S マタイによる福音書	27:46 三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。	
S マタイによる福音書	27:50 しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。	
S マルコによる福音書	15:34 三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。	
S ルカによる福音書	8:8 また、ほかの種は良い土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」イエスはこのように話して、「聞く耳のある者は聞きなさい」と大声で言われた。	
S ルカによる福音書	23:46 イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。	
S ヨハネによる福音書	7:28 すると、神殿の境内で教えていたイエスは、 <u>大声</u> で言われた。「あなたたちはわたしのことを知っており、また、どこの出身かも知っている。わたしは自分勝手に来たのではない。わたしをお遣わしになった方は真実であるが、あなたたちはその方を知らない。	
S ヨハネによる福音書	7:37 祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。	
S ヨハネによる福音書	11:43 こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。	

30 人々はイエスを捕らえようとしたが、手をかける者はいなかった。イエスの時(→イエスの十字架の死と復活の時、すなわち神の子としての真の栄光が現れる時)はまだ来ていなかったからである。

31 しかし、群衆の中にはイエスを信じる者が大勢いて、「メシアが来られても、この人よりも多くのしるし(→ギリシア語「セメイオン」:奇跡) をなさるだろうか」と言った。

【参考】わたしの時／イエスの時／御自分の時

タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数: 7 / 聖句等の総数 33250]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳)
S マタイによる福音書	26:18 イエスは言われた。「都のあの人のところに行つてこう言いなさい。『先生が、「わたしの時が近づいた。お宅で弟子たちと一緒に過越の食事をする」と言っています。』」	
S ヨハネによる福音書	2:4 イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」	
S ヨハネによる福音書	7:6 そこで、イエスは言われた。「わたしの時はまだ来ていない。しかし、あなたがたの時はいつも備えられている。」	
S ヨハネによる福音書	7:8 あなたがたは祭りに上って行くがよい。わたしはこの祭りには上って行かない。まだ、わたしの時が来ていないからである。」	
S ヨハネによる福音書	7:30 人々はイエスを捕らえようとしたが、手をかける者はいなかった。イエスの時はまだ来ていなかったからである。	
S ヨハネによる福音書	8:20 イエスは神殿の境内で教えておられたとき、宝物殿の近くでこれらのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。	
S ヨハネによる福音書	13:1 さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。	

32 ファリサイ派の人々は、群衆 (→①エルサレムの住民、②ガリラヤから来た巡礼者、③その他の地方[ディアスポラ]から来た巡礼者) が (宗教的指導者を恐れて) イエスについてこのように (ひそひそと) ささやいているのを耳にした。祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスを捕らえるために下役たちを遣わした。

→祭司長たちはエルサレム神殿の職務を任された人々である。ファリサイ派は、律法の中でも、特に安息日や断食、施しを行うこと、宗教的な清めを強調した。律法学者の多くがファリサイ派に属した。

下役(したやく)は神殿を警備して守るレビ人の守衛で、エルサレムのユダヤ人指導者会議である最高法院が民衆を統治するのを手助けした。

33 そこで、イエスは言われた。

「(父なる神がわたしに与えられた、この世での残された時間は少ないが) **今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる。それから、自分をお遣わしになった方のもとへ帰る** (→昇天)。

34 **あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、(罪人である) あなたたちは来ることができない。」**

35 すると、ユダヤ人たち (→ユダヤ人の宗教的指導者たち: 最高法院に属する議員で、祭司職に就き、ファリサイ派や他の指導者たちに影響力を持つユダヤ教教師の人たち) が互いに言った。

「わたしたちが見つけることはないとは、いったい、どこへ行くつもりだろう。ギリシア人 (→非ユダヤ人) の間に離散しているユダヤ人 (→ディアスポラ) のところへ行って、ギリシア人に教えるとでもいうのか。(そんなことができるはずがない。) 36 『あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない』と彼 (→あいつ) は言ったが、その言葉はどういう意味なのか。」

→ (リビング・バイブル) このことばに、ユダヤ人の指導者たちはすっかり戸惑いました。

「いったいどこへ行くつもりだろう。もしかしたら、ユダヤを出て、外国のユダヤ人や、あるいは外国人に教えを伝えようとでも考えているのかもしれない。36 だが、捜しても見つけ出せないとは、どういうことだろう。『わたしのいる所に来ることができない』というのも、何のことやらまるで見当もつかない。」

【参考】 最高法院 サンヘドリン sanhedrin

ローマ帝国支配下のユダヤにおける最高裁判権を持った宗教的・政治的自治組織（ユダヤ議会）、最高律法教育機関でエルサレム神殿内に置かれた。

メンバーは、71人で構成（議長一世襲制の大祭司と副議長が各1人、議員69人、計71人）された。「最高法院」「長老会」などで新約聖書に登場する。→下記【参考】1、2参照

①モーセが神の命令によって召集した70人の長老に起源を持つとされる（民数記11：16、ユダヤ教のラビ伝承）。

→民数記11：16 主はモーセに言われた。「イスラエルの長老たちのうちから、あなたが、民の長老およびその役人として認めうる者を七十人集め、臨在の幕屋に連れて来てあなたの傍らに立たせなさい。

②権限等については、ギリシア語資料（新約聖書）とヘブライ語資料（タルムード伝承）のいずれに依拠するかによって説が異なるが、①宗教問題を扱う部門と②政治問題を扱う部門とに分れていたとする説が有力である。

③メンバーは、①サドカイ派（→【参考】3）を代表とするの貴族祭司長（祭司長は、神殿の中での祭儀、財政、警察を担当し、最高法院の中核であった）のグループ、②ファリサイ派（→【参考】4）を代表とする律法学者のグループ、③長老（一般人の代表者、経済的に余裕を持った年配の人で、祭司長と密接な関係を持ち、指導的立場にあった）のグループの三グループから構成されていた。

④会合は、安息日や祝祭日を除き、朝のいけにえを捧げる時（AM8時半頃？、AM9時：朝の祈り）から夕刻のいけにえを捧げる時（PM2時半頃？、PM3時：夕の祈り）に行われた。

→ユダヤでは、神殿ないし会堂での祈りが日に3度（AM9時、正午、PM3時）行われた（朝と夕の祈りは必須、正午の祈りは任意）。

⑤司法（裁判）権を行使し、刑の執行を行なうこともできた（イエスが裁判にかけられたころには、死刑宣告をする権限はローマによって剥奪されていた）。

⑥神殿祭儀の監督指導を行ない、祭司や裁判官の任命も行った。

⑦新月と閏（うるう）年の宣言、ユダヤの祝祭日を決定する権限も持っていた。

※AD70年の神殿崩壊後は各地を転々、200年頃からは、ローマ帝国の皇帝テオドシウス帝（在位：AD379～395）によって祭司政治が廃絶されるまで、ティベリアス（AD20年頃、ヘロデ大王の子ヘロデ・アンティパスにより、破壊された村の跡地に建設され、ガリラヤ地方の首都となった。アンティパスの後見人であったローマ皇帝、ティベリウスに因んでティベリアスと名付けられた。→ヨハネによる福音書6：1、23、21：1）におかれ、ローマ帝国内のユダヤ人の政治的、宗教的生活の中心となった。

【資料】 1. 四福音書にある「最高法院」「長老会」

マタイによる福音書	5:22 しかし、わたしは言っておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。
マタイによる福音書	26:59 さて、祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にしようとしてイエスにとって不利な偽証を求めた。
マルコによる福音書	14:55 祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にするためイエスにとって不利な証言を求めたが、得られなかった。
マルコによる福音書	15:1 夜が明けるとすぐ、祭司長たちは、長老や律法学者たちと共に、つまり最高法院全体で相談した後、イエスを縛って引いて行き、ピラトに渡した。
ルカによる福音書	22:66 夜が明けると、民の長老会、祭司長たちや律法学者たちが集まった。そして、イエスを最高法院に連れ出して、
ヨハネによる福音書	11:47 そこで、祭司長たちとファリサイ派の人々は最高法院を召集して言った。「この男は多くのしるしを行っているが、どうすればよいか。」

【資料】2. 使徒言行録にある「最高法院」「長老会」

使徒言行録	5:21 これを聞いた使徒たちは、夜明けごろ境内に入って教え始めた。一方、大祭司とその仲間が集まり、最高法院、すなわちイスラエルの子らの長老会全体を召集し、使徒たちを引き出すために、人を牢に差し向けた。
使徒言行録	5:27 彼らが使徒たちを引いて来て最高法院の中に立たせると、大祭司が尋問した。
使徒言行録	5:41 それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行き、
使徒言行録	6:12 また、民衆、長老たち、律法学者たちを扇動して、ステファノを襲って捕らえ、最高法院に引いて行った。
使徒言行録	6:15 最高法院の席に着いていた者は皆、ステファノに注目したが、その顔はさながら天使の顔のように見えた。
使徒言行録	22:5 このことについては、大祭司も長老会全体も、わたしのために証言してくれます。実は、この人たちからダマスコにいる同志にあてた手紙までもらい、その地にいる者たちを縛り上げ、エルサレムへ連行して処罰するために出かけて行ったのです。」
使徒言行録	22:30 翌日、千人隊長は、なぜパウロがユダヤ人から訴えられているのか、確かなことを知りたいと思い、彼の鎖を外した。そして、祭司長たちと最高法院全体の召集を命じ、パウロを連れ出して彼らの前に立たせた。
使徒言行録	23:1 そこで、パウロは最高法院の議員たちを見つめて言った。「兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました。」
使徒言行録	23:7 パウロがこう言ったので、ファリサイ派とサドカイ派との間に論争が生じ、最高法院は分裂した。
使徒言行録	23:15 ですから今、パウロについてもっと詳しく調べるという口実を設けて、彼をあなたがたのところへ連れて来るように、最高法院と組んで千人隊長に願い出てください。わたしたちは、彼がここへ来る前に殺してしまう手はずを整えています。」
使徒言行録	23:20 若者は言った。「ユダヤ人たちは、パウロのことをもっと詳しく調べるという口実で、明日パウロを最高法院に連れて来るようにと、あなたに願い出ることになっています。」
使徒言行録	23:28 そして、告発されている理由を知ろうとして、最高法院に連行しました。
使徒言行録	24:20 さもなければ、ここにいる人たち自身が、最高法院に出頭していた私にどんな不正を見つけたか、今言うべきです。

【資料】3. 富裕層の支持が多いサドカイ派 →ヘレニズム（＝ギリシア風）文化に対して柔軟

サドカイ派は、その名を祭司の主流派であるツアドク（ザドク）に由来し（サムエル記下 20：25、列王記上 1：38～44）、神殿詣（神殿信仰）に重点を置き、そこで犠牲を献げることを教えた。裕福な上流社会のユダヤ人（サムエル記下 20：25、列王記上 1：39～45）＝祭司、教養のある金持ち、そして貴族に属する人々でファリサイ派と対立した。彼らはモーセ五書（トーラー）をファリサイ派のような多くのこじつけの議論や問題に陥ることなく非常にまじめに解釈した。ファリサイ派との違いは、サドカイ派は神が人々を死後によみがえらせることが律法に記されていないことから、死後の世界や復活を信じず、終末論の死後の世界に対する信仰もなかった。サドカイ派はファリサイ派と異なり、あまり人気がなく、大衆の支持がなかったが、宗教と政治の面では力があり、非常に影響力があった。

【資料】4. 貧困者に支持者の多いファリサイ派 →ヘレニズム（＝ギリシア風）文化に対して否定的

ユダヤ教の教派で、イエスの時代に最も高く評価されていたのはファリサイ派で、現代のユダヤ教の諸派もほとんどがファリサイ派に由来している。

ファリサイ派はハスモン朝※1時代に形成され、死後の世界を信じ、律法を守ること、特に安息日や断食（週2回、木曜日と金曜日）、施しを行うことや清めの儀式を強調した。

律法学者（モーセ五書〈トーラー〉－創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記－を研究する学者）の多くがファリサイ派に属し、聖書（旧約）の独自の研究と伝承による解釈を固執、主張した。聖職者である律法学者（ラビ rabbi）を信仰の仲介者とし、ユダヤ人会堂の多くを管理していた。ファリサイ派は、律法を研究、遵守して、どのように生きるべきかについて教えていたために、民衆に尊敬されていた。ファリサイ派の名称は、「パルーシム」＝「分離する者」あるいは「清い者」を意味するヘブライ語に由来するとされるが、正確には不明である。

ユダヤ人指導者の中には密かにイエスを信じる者もいたが、ユダヤ人会堂から追放されるのを恐れ、このことを公言しなかったし、もし、それが発覚した場合は、ユダヤ人指導者たちは、イエスを信じるようになった者をユダヤ人共同体や会堂から追放した（ヨハネによる福音書9：22）。

イエスを訪問したニコデモは最高法院に属する議員で、ファリサイ派の教師でもあった（ヨハネによる福音書3：1）。

また、ファリサイ派の人々はイエスが自分たちの立場や影響力を脅かすと考え、イエスを殺そうと企んだ（マタイによる福音書26：1～5、マルコによる福音書14：1～2、ルカによる福音書22：1～6、ヨハネによる福音書11：45～57）。

エルサレム神殿の崩壊（AD70年）後はユダヤ教の主流派（神殿に拠っていたサドカイ派は消滅）となり、会堂に集まって聖書を読み、祈りを捧げるスタイルが、ユダヤ教のスタイルとなっていた。

※1：BC 140年頃からBC 37年までユダヤの独立を維持して統治したユダヤ人王朝。BC 166年に起きたユダ・マカバイによるセレウコス朝軍への決起から約20年後に成立。フラウィウス・ヨセフスによればハスモンという名は一族の先祖、祭司マタティアの祖父の名前に由来しているといわれている。

フラウィウス・ヨセフスは、帝政ローマ期の政治家及び著述家である。AD66年に勃発したユダヤ戦争でユダヤ軍の指揮官として戦ったがローマ軍に投降し、ティトゥスの幕僚としてエルサレム陥落にいたる一部始終を目撃、後にこの顛末を記した「ユダヤ戦記」や「ユダヤ古代誌」を著した。

ヨセフスは、青年時代にサドカイ派やエッセネ派などを経て、最終的にファリサイ派を選んでいる。